

ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

北海道 新ひだか町社会福祉協議会

主幹 さいとう ことね 齊藤 琴音さん (写真: 上)

係長 おざき あやこ 尾崎 文子さん (写真: 左) 主事 さとう あかり 佐藤 朱莉さん (写真: 右)



【利用者が主催者になり、さらに輪が広がっていく】

新ひだか町は海と山に囲まれた地域ながら、自衛隊や保健所などの行政施設や郊外型商業施設があり、毎年のように町外出身者が一定数転入してきます。そのなかには子育て世帯も多くいますが、町外出身者は親戚や親しい友人など、頼れる人が近くにいないため孤立しがちです。地域の保健センターに勤める保健師からは、そんな母親たちを手助けしたいと、新ひだか町社会福祉協議会(以下、町社協)に相談がありました。

相談を受けた齊藤さんは、「母親同士が情報や悩みを共有できるように」と、母親のための茶話会を企画しました。ただ会話をするだけでなく、育児支援ボランティアによる託児付きの「子育てママのリラックス講座」をセットで

実施することにしました。茶話会では、育児相談のニーズが多くあり保健師に参加を依頼したほか、町内の社会教育活動団体で活躍するメイクやマッサージの講師などの協力も得ました。特に茶話会は大いに盛り上がり、実施後のアンケートでは「もっと話したかった」という声が多数寄せられたほどです。

昨年度に実施した3回の講座が好評だったことから、今年度からは町社協の事業として毎月1回「ママカフェ」を開催することになりました。「ママカフェ」では企画から運営まで、すべて有志が集まった母親が主体となっています。齊藤さんたちと母親たちは何度も打ち合わせを重ね、企画内容もどんどんバージョンアップしていきました。はじめは利用者だった母親たちが

運営に参加し、その友人が利用者として参加するといった具合で、全体の参加者数が増えるとともに、保健師、図書館職員など、協力者の輪も広がりを見せています。

ママカフェを実施し、相談相手ができること以外の良さがあることもわかりました。「公民館にお母さんや子どもたちが来るようになり、以前からよくそこに集まっていたお年寄りの皆さんも喜んでます。何より、お母さんたちの意識が『行政にやってもらう』から『自分たちが活動の主体』に変化したことがとても大きいです」(齊藤さん)。

ママカフェの活動をきっかけに、別のボランティア活動に参加した母親もいて、地域活動のロールモデルとしても、今後さらに発展しそうです。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策2023」の活用に向けて
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア
- P.7 ▶ キーパーソンから学ぼう!
- P.8 ▶ 災害ソ・ノ・ト・キ! | インフォメーション

「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策2023」の活用に向けて

座談会



全国ボランティア・市民活動振興センターでは、近年のボランティア・市民活動および社協を取り巻く環境を踏まえつつ、全国の市区町村社協のボランティアセンターの当面のあり方や取り組みの方向性を示した「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策2023」(以下、強化方策2023)を令和5年6月に策定しました。

強化方策2023は、各市区町村社協のボランティアセンターが、その置かれている環境や活動状況ならびに各社協の活動方針と適合した形で、その機能を発揮することで、社協の活性化および一層の発展につながることを期待するものです。

そこで、本特集では、強化方策2023の策定に携わった検討委員会の委員の皆様から、強化方策2023のポイントや活用方法などについてお話しいただき、市区町村社協のボランティアセンター活動のさらなる強化に向けたヒントを探ります。

座談会出演者



- 日本福祉大学 学長/検討委員長 はらだ まさき 原田 正樹さん
- 東海村社会福祉協議会/検討委員 ふるいち 古市 こずえさん
- 氷見市社会福祉協議会/検討委員 いいだ なお 飯田 奈緒さん
- 半田市社会福祉協議会/検討委員 まえやま けんいち 前山 憲一さん
- 新潟市社会福祉協議会/検討委員 わたなべ まさひろ 渡邊 雅弘さん

左から原田さん、古市さん、前山さん、飯田さん、渡邊さん

強化方策2023の策定の背景について

原田 今回は強化方策2023について、内容を紹介するとともにどのようにメッセージを広げていくのかについて、策定委員の皆さんにお話を聞いていきたいと思えます。

策定のプロセスのなかで、全国の社協ボランティアセンター（以下、社協VC）に実態調査をしました。私が印象的だったのは「VCという看板を掲げている社協は多いけれど、専任職員はほとんどおらず、予算も少ない」という現状です。一方で、近年は社協VCや市民活動に対する社会の期待が大きくなりつつあります。このギャップ

のなかで、職員の方々が悩んでいる状況が実態調査で浮かび上がってきた気がします。こうしたことを前提としながら、強化方策2023の検討委員会を設け、委員の皆さんと1年近く議論をしてきましたので、本日は各検討委員の視点から強化方策2023について説明してもらいます。

強化方策2023で示す社協VCの5つの役割とは

原田 強化方策2023では、社協VCの5つの基本的な役割について整理をしています。まずは、この部分について紹介していただきます。

飯田 ひとつめの役割は、「地域ニーズの集約」です。VCに集まる多様なニーズがどのようなものかを、広く地域や社会に発信していくという役割があります。

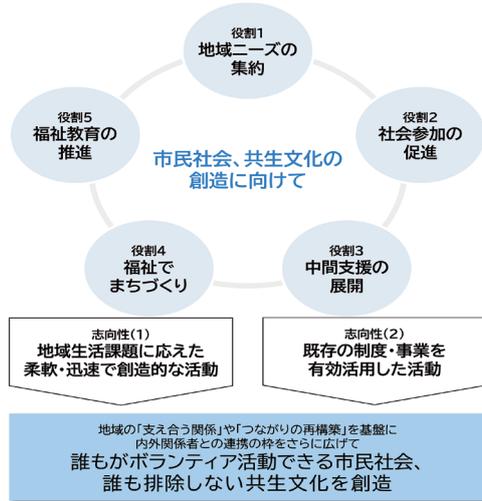
ふたつめの役割は、「社会参加の促進」です。あらゆる人たちの社会参加を応援する役割があります。

三つめの役割は、「中間支援の展開」です。地域福祉を推進するためのプラットフォームをつくる役割があります。

四つめの役割は、「福祉でまちづくり」です。ニーズやプラットフォームを通して新たな資源を開発し、課題を解決していく役割があります。

五つめの役割は「福祉教育の推進」

図1：社協VCの5つの役割



です。ニーズが集まってくることも、地域活動への参加者を増やすことも、福祉教育の考え方が根底にあります。

社協VC機能のチェックリストとレーダーチャートとは

飯田 この5つの役割を果たしているかどうかを評価するのは難しいと考え、客観的に自己評価ができるチェック項目を作成し、強化方策2023に掲載しました。その際、5つの役割に加え「社協VCの組織マネジメント」という6つめの役割を追加し、社協組織におけるVC運営・経営、財源、職員研修についてもチェックができるようにしました。

チェック項目は6つの役割に対して5項目ずつ設けており、それらを点数で評価し、レーダーチャートに落とし込むことで、自分たちのVCの強みや弱みがわかるようにしています。

原田 チェック項目やレーダーチャートが、各社協の状況や課題を皆で共有するとともに、将来に向けてどのように発展していくのかを考えるツールになっているということですね。

このチェック項目をさらに幅広く活用する方法として、地域のボランティアの方々と一緒に評価してみるのもよいと思います。そしてボラン

ティアの方々にも、職員と一緒に社協VCのあり方を考えていただくことも、有効な活用法のひとつだと思います。

古市 コロナ禍でオンライン会議が主流になり、市区町村社協同士の横のつながりが少し弱くなりましたので、チェック項目やレーダーチャートをツールに、近隣の社協ともコミュニケーションが取れそうです。

強化方策2023で示す社協VCの5つの運営パターンとVCの意義

原田 社協VCの5つの運営パターンについては、強化方策2023にパターンごとに「名称」「概要・取り組みやすい地域」「特長・強み」「留意点」を記載しています。ここで皆さんから、各パターンについてポイントをご紹介いただきたいと思います。

図2：社協VCの5つの運営パターン

1. VC・地域福祉混合型	2. VC中核型	3. 独立連携型	4. VC・地域福祉一体型	5. VC・地域福祉運動型
<p>社協全体の業務にVC、地域福祉活動推進部門の業務も溶け込んでいる。VCの看板を掲げない。VCとしての単独事業は実施していない。</p>	<p>地域福祉活動推進部門の業務の中核として運営。VCの担当職員を配置。VCの役割・機能を区分することも可能。</p>	<p>VCが地域福祉活動推進部門とは独立して運営。VCの担当職員を配置。VCとしての単独事業を実施している。</p>	<p>地域福祉活動推進部門の業務として一体的に運営。職員は兼務。ただしVCの看板を掲げ、VCの役割・機能を明確に意識して業務を遂行しているが、VC業務だけを切り出すことは困難。</p>	<p>地域福祉活動推進部門の業務と連動する部分もあるが、VCとしての単独事業もある。VCへの相談から個別支援につながったり、地域づくりからVCにつながる。</p>

古市 ひとつめのパターンは「VC・地域福祉混合型」です。VCの看板は掲げず、社協全体の業務にVCと地域福祉の業務が溶け込んでいるイメージです。人口や社協の規模が小さく、住民の顔が見えるような関係性が築けている地域で取り組みやすいと思います。あえてVCの看板を掲げなくても、職員との個別のつながりを頼りに、相談やニーズが集まってくる体制です。

ただし、社協VCの役割や機能を発揮する機会がないため、コーディネート力に対する意識が希薄になりがちです。住民のボランティア活動や気持ちをきちんとつなげるためにも、この点はおろそかにしてはいけません。

前山 ふたつめのパターンは「VC中核型」です。比較的大きな自治体において、地域福祉活動推進部門の大きなくりのなかにVCが独立して存在している体制です。

メリットは、地域の全体像を見ながらVCの業務に取り組むため、社協全体の動きとVCの足並みがそろいやすい点です。一方で、VCの力が弱くなると他部門に吸収され、VCらしさがなくなってしまう点がデメリットです。VCとして大事にしていることを明確に打ち出していかなければ、中核型の良さは活かしきれないかもしれません。

古市 3つめのパターンは「独立連携型」です。VCが独立しており、他部署との連携もしっかり図られている体制をイメージしています。これはVC単独で、ある程度財源が確保できること

助成金情報

(公財)B&G財団「子ども第三の居場所設置・運営のための助成」(第1次募集締切:2023年9月30日締切)

子どもたちが安心して過ごせる環境で、自己肯定感、人や社会と関わる力、生活習慣、学習習慣など、将来の自立に向けて生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」の設置および運営を支援します。開設費助成金:1件5,000万円以下、運営費助成金:1件月額120万円以下(最長3年間)。(詳細は「B&G財団「子ども第三の居場所」」で検索)

が前提になりますので、人口や社協の規模がそれなりに大きな地域で取り組みやすいと思います。

メリットとしては、独立した組織なので柔軟性があり、判断も早い点があげられます。一方、独立している分、社協内に縦割りの状況が生まれかねませんので、意識的に他部署と連携を図っていく必要があります。

前山 4つめのパターンは「VC・地域福祉一体型」です。

このパターンは、VCの看板を掲げ、役割や機能を意識して業務を遂行しているけれども、地域福祉活動推進部門の業務として一体的に運営されており、VCの業務だけを切り出すことは困難という体制です。人口や社協の規模がある程度大きく、区社協を有している地域で取り組みやすいといえます。メリットとデメリットは、パターン1や2とほぼ同じです。

前山 5つめのパターンは「VC・地域福祉連動型」です。これは私ども半田市社協の体制に近いと思います。VCとして独立しているけれど、個別支援などの地域福祉にも中心的な立場で連動しているという体制です。人口や社協の規模がある程度大きく、個別支援のノウハウを有する地域で取り組みやすいと考えます。VCが地域の幅広い困り事を受け止められるというメリットはありますが、VC独自の役割や機能に対する組織全体の戦略や理解は欠かせません。

原田 実際にはもっと多様なパターンがあると思いますが、強化方策

2023では主な5つのパターンについて整理しました。市区町村社協のVCは、今までのように一様で語られる時代ではなくなったということですね。

こうしたなかで、市区町村社協がVCを運営する意義、社協VCの存在意義や役割をどのようにお考えになりますか。

渡邊 3つの意義があると考えています。ひとつめは、ボランティアや市民活動を通して人々が集うことです。住民に福祉活動に参加してもらう方法のひとつとして、ボランティアは意義のあるものだと感じています。

ふたつめは、VCという名称があることで、住民が社協につながりやすくなることです。新潟市では「社協」という名前は知っていても具体的な活動はわからないという調査結果があります。しかし、その一方で「ボランティア」という言葉から活動をイメージできる方は多いのではないかと思います。だからこそ、VCの看板を掲げることが大切であると考えています。

3つめは、ボランティアは社協のスピリットを体現できるひとつのかたちであるということです。社協には、社会や制度では対応できないことに対して支援をするという役割があります。その役割を果たすうえで、VCは重要な存在といえます。

強化方策2023を どう活用していくのか

原田 最後に、強化方策2023の活用方法についてお伺いしたいと思います。

飯田 今回、策定にあたって実施した全数調査の結果で、「どのような人がボランティアコーディネーターを担当しているか」との設問に対し、経験の浅い若手職員や非正規職員、または兼務との回答が多くみられました。若手職員や非正規職員だけではなく、ベテラン職員と一緒に社協VCを担当することで、若手職員にとっては視野を広げるチャンスになり、ベテラン職員にとっては若手の育成にもつながるため、そうした体制づくりも重要です。その際、強化方策2023を活用していただければ、社協VCをさらに強化できると思うのです。

前山 当市社協でも、新人職員がベテランのボランティアコーディネーターに付いて仕事をしています。ベテランのボランティアコーディネーターが自分のスキルをうまく言語化できない際には、強化方策2023のチェックリストを活用し、「私が言いたいのはこういうことです」と示すことができると思います。強化方策2023は、社協VCの職員として大事なことや、なすべきことが可視化されているため、大変わかりやすい指針になるはずですよ。

また、行政と予算等の折衝をする際も、「これだけのことをしています」と提示するのに活用できるため、可視化することはとても良いことだと思います。

渡邊 この強化方策2023をVC担当だけでなく、社協内に幅広く共有することが、とても重要だと思っています。

私はこの座談会の前に、当市社協の職員にこの強化方策2023を読んでも



原田さん



古市さん



飯田さん

助成金情報

(社福)読売光と愛の事業団「がん患者在宅療養支援の助成先を募集」(2023年9月21日締切)

進行がんなどのため在宅で療養する患者やその家族への支援活動に助成します。助成対象は地域で活動するボランティアグループ・団体で、おおむね3年以上活動していることなどが条件です。(詳細は「読売光と愛の事業団」で検索)

らい、話を聞かせてもらいました。すると「チェックリストは点数付けも悩ましく、つまずいてしまう」「1人でチェックをしていると悩んでしまう」「他の人と一緒にチェックをする機会があるといい」「チェックリストをワークとしたプログラムをつくってほしい」などの意見が出ました。

これらの意見から、強化方策2023は職員のコミュニケーションツールになるのではないかと思います。一緒に読み合わせをするなかで、わかりにくい点や、課題としてあがったことなどについて一緒に考えることがとても大切になると思います。これはもしかすると、都道府県・指定都市社協が市区町村の社協を支援する際にも活用できるのではないかと思います。

強化方策2023は、読んだ人によって受け取り方も違うはずですが、その時、ミスマッチが起きないように、強化方策2023の内容を翻訳できる人がいることが大切だと思います。もしかすると、それは都道府県や指定都市社協の役割のひとつになるのではないかと思います。それぞれの地域性や文化などに合わせて、どのように市区町村社協を支援していこうと考えているのか、自分たちの言葉で発信していただくことが大切ではないかと思います。

古市 当市のような人口規模の小さい地域では、マイノリティーなニーズが増えていますし、重層的支援体制整備事業などが始まるなかで、社協職員の相談支援に関わるスキルや専門性が大変上がっていると感じています。これはとても良いことですが、どこかで生活者の視点がおざなりになっていないか、自らを見つめ直すことも必要だと思います。そういう時、強化方策2023を読んでいただくと、最初の



渡邊さん

フラットな気持ちに戻れるような内容がたくさん盛り込まれているので良いと思います。

コロナ禍がようやく落ち着いてきた今、もう一度、社協やボランティアの原点に立ち返り、私たちがともに再出発する時だと思うのです。ぜひ、強化方策2023をVCの職員だけでなく、社協職員全体に読んでもらい、社協の原点を思い出していただけたらと思っています。

原田 強化方策2023は、多様な方々と社協や社協VCについて考えるコミュニケーションツールになるということがよくわかりました。

また、強化方策2023には、社協VCの役割や機能だけでなく、社協VCが何をめざすのか、どのような地域社会をつくっていくのかについて、しっかりと理念が描かれています。その理念とは、住民の自主的・自律的な活動



前山さん

であるボランティア・市民活動を通じて、住民主体の地域福祉を推進することです。そしてこのボランティアというのは、制度や行政、専門職を補完するものではなく、住民が自分たちの手で町を良くしていこうとする活動です。それにより誰も排除しない共生文化の創造をめざすことは、社協VCの使命ともいえます。その意味で、ボランティアと地域福祉の関係をもう一度しっかりと位置づけ直し、そこに社協VCとしてどうアプローチしていくのかを検討することが必要です。

強化方策2023は、そうした内容を整理し、あるべき姿を語るだけではなく、チェックリストで自己評価をし、今後どのような発展をめざせばよいのかを提示しています。ぜひ、多くの皆さんにご活用いただければと思います。



座談会の様子はオンライン配信され、全国の都道府県社協、指定都市社協の担当職員が視聴した

通信欄

強化方策2023は、全社協「地域福祉・ボランティア情報ネットワーク」ホームページ (<https://www.zcwvc.net/volunteer/reference/zenshakyo-vc/>) にデータを掲載しています。また、7月中旬に、都道府県・指定都市社協を通して、市区町村社協へ1部配布予定です(冊子の追加送付はございません)。

助成金情報

(公財)ソニー音楽財団「ソニー音楽財団 子ども音楽基金」第5回(2024年度)助成の募集(2023年7月18日17時必着)

子どもたちが音楽を通じた体験や活動に触れることで、感動する心を育てることを目的とした助成事業です。助成対象は音楽にふれる機会の少ない地域での子どものための演奏会や、病児・障害児を対象とした楽器体験、児童養護施設での継続的な音楽療法のほか、ひとり親家庭やさまざまな国籍の子どもたちへの音楽教育等、多種多様な活動が対象です。(詳細は「ソニー音楽財団 子ども音楽基金」で検索)

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



教育学部教育学科2年
ながぬま あかね
長沼 朱音さん

第4回

宮城県

東北福祉大学「震災語り部」

団体紹介

東北福祉大学の生涯学習ボランティア支援課で学生主体の防災・減災教育事業を実施しており、そのひとつが「学生による震災語り部」。自らの被災体験を語る活動で、長沼さんは東日本大震災での経験を伝えている。

3.11で被災した実体験を語り継ぐ「震災語り部」として、防災・減災教育に携わる

ボランティアに挑戦しようと思ったきっかけは？

小学1年の時に、東日本大震災に遭いました。私の住んでいた福島県浪江町^{なみのえ}請戸地区^{うけど}は、地震、津波、原発事故と三重の被害を受けました。私の家も流され、家族とともに新潟県^{かした}柏崎市^{かしわぎ}や福島県会津若松市^{あいづわかまつし}で約1年間の避難生活を送りました。その時にボランティアの方たちに多くの支援をいただいたことが心に残り、いつか「自分も人の役に立ちたい」と思うようになったのが原点かもしれません。高校の時にもボランティアをしたいと思っていたのですが、挑戦する機会がなく、「大学に入ったら絶対にしよう」と決めていました。東北福祉大学に入学後、学内で募集しているボランティアのなかに「震災語り部」があるのを見つけ、「これなら自分の経験を語ることで人の役に立てるのではないか」と思い、参加しました。

防災教育や「震災語り部」で伝えたいのはどんなこと？

私と同じ請戸小学校出身の先輩が中心となって作った紙芝居を使って、被災の実体験を語る活動をしています。紙芝居には、地震発生直後に子どもたちが避難する様子が克明に描かれています。東北

福祉大学では、宮城県内外での活動や全国の中学・高校から修学旅行生を受け入れ、震災学習を行っており、私も訪れた生徒らに向け、この紙芝居を読み聞かせるとともに、自身の体験を伝えています。最初のうちは「伝えたい」という思いが強すぎて、話があちらこちらに飛んでしまうこともありましたが、回を重ねるごとに上達していると感じます。聞いていただく人に、他人事ではなく当事者の立場になって、自分なりの気づきを得てもらうにはどう語りかければいいのか、いつも意識しています。3.11から10年以上がたち、震災語り部の方たちのなかには高齢になって引退される方も少なくありません。震災の記憶を風化させないよう、私たち若い世代がこの活動を受け継いでいく必要があります。ほかにも東北福祉大学では、連携協定を結んでいる栃木県さくら市社会福祉協議会と協働での減災運動会の開催や、他大学との連携による防災ワークショップの開催など、組織や地域の垣根を越えた活動が盛んです。私



修学旅行生への震災語り部活動の様子

もそれらの場に参加し、子どもたちや海外の方へ防災意識の大切さを伝えています。

ボランティアの醍醐味はどんなところにある？

人のために自分にできることがあって、誰かの役に立つことが自分の喜びにもなる。それがボランティアの素晴らしいところ。震災語り部では、当事者として、一人でも多くの人に私の体験を伝えたいという使命感をもって活動しています。学校の授業では学べないことを、ボランティアで体験させてもらっているという側面もあります。大学卒業後は、教職に就きたいと思っています。ボランティアで学んだことを、将来にしっかり役立てていきたいです。

社協VCが若者とつながるには？

社協VCから大学への積極的な声かけが必要だと思います。なかには依頼を待つ方針の大学もあれば、相談をもらわないと動かないという社協VCもあり、ミスマッチが発生していると思います。そういう面では仙台市社協VCとは良い関係性が築けており、SNSの活用や大学の協力により若者の興味を理解し、参加する若者の声を反映することで参加率向上につながっています。

東北福祉大学 地域創生推進センター
生涯学習ボランティア支援課

わたなべ しんや
渡辺 信也さん
係長・コーディネーター

イベント・講座情報

(特非) 日本NPOセンター「NPOと行政の対話フォーラム'23」(100名 [先着順・定員になり次第締切]、2023年8月31日開催)

本フォーラムでは、行政とNPOをはじめとする多様な主体が協働して取り組む、「誰も取り残さない地域づくり」についてともに考えます。

(詳細は「NPOと行政の対話フォーラム」で検索)

キーパーソンから学ぼう!



お互いにつながる
はじめの一步

人と人とのネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さまははじめの一步を踏み出しましょう!

第4回

「やんちゃ」な子どもたちが 安心できる居場所をつくりたい



滋賀県 NPO法人 やんちゃ寺
代表 佐藤 すみれさん

滋賀県草津市出身。臨床心理士の資格を取得し、県職員として中学や高校、児童相談所などで子どもの支援に従事。2019年8月にやんちゃ寺を設立。草津市の遍照寺を会場とし、月3回、中高生の居場所や子ども食堂の運営などを行う。

荒れていた高校時代。 心理学を通して客観視できました

私は高校時代、学校に行かず髪を金髪に染めて夜遊びをする、いわゆる「やんちゃ」な生活をしていました。家庭や学校が自分の居場所とは感じられず、自分の価値を感じられる場が見つからないなかで選んだのが、夜遊びをするようなコミュニティだったのです。それは本心から「これでいい」と思える居場所ではありませんでしたが、寂しさをまぎらわせるために、誰かとつながっている気分になりたかったのです。しかし、当時からそのように自分の気持ちを俯瞰できたわけではありません。周囲の支えで大学に進学し、心理学を学ぶうちに、自分がなぜ荒れてしまったのかを理解できるようになったのです。次第に私の気持ちも安定し、「心理学の道で人の役に立てるのではないか」と思うようになりました。



昼食は子どもたちが一緒に作る。メニューは子どもたちのリクエストを順番に。この日はオムライス

やんちゃな子どものための 社会資源が、もっと必要です

その後、臨床心理士として滋賀県庁で子どもの支援に取り組むなかで、行政は支援できる範囲に限られていて、特に反社会的な不適応行動に出やすい子どものための社会資源が不足していると感じました。そこで、働きながらボランティアとして立ち上げたのが「やんちゃ寺」です。やんちゃといわれる子どもたちが安心して過ごすなかで、ありのままの自分に肯定感を得られる居場所をつくりたいと考えました。会場を寺にしたのは、当時関わっていた子どもたちが「自分を変えたい」という意味合いで「修行をしたい」「滝に打たれたい」といったことを話していたからです。

やんちゃ寺の運営を進める一方で、寺の檀家さんや周囲の商店街など、地域の方から理解を得るのには苦労しました。



子どもたちの居場所「やんちゃ寺」正面

社会的に信用がある団体であることを伝えるため、公的機関から助成を受けたことや、私が学校などで講演をしたこと、やんちゃ寺での活動やその成果などを文書にまとめ、地域の方に配布して説明することをこまめに繰り返しました。すると少しずつ理解が広がっていき、今では子どもたちのために食材を届けてくださるなど、ご協力をいただいています。

高校時代の私が「行きたい」と 思えるように努力します

ボランティアスタッフの体制づくりにも力を入れています。子どもたちに自ら心を開き、エネルギーを与える姿勢がある方に来ていただけるよう、応募の段階でしっかり選定し、研修や面接も行います。やんちゃ寺の成果は、一人ひとりと質の高い関わりをすることですから、スタッフの選考は慎重に行っています。

また、やんちゃ寺が多くの子どもを目にとどまるよう、あらゆるSNSを活用し、今時の見せ方ができるよう努力しています。「この人がいるなら行ってみよう」と思ってもらえるよう、私の考え方や人となりをきちんと開示することも心がけています。そうでないと、子どもたちの心に響かないと思うのです。高校時代の私をもっと「行きたい!」と思えるよう、やんちゃ寺を格好よく、所属することが誇りに感じられるような見せ方をめざして工夫していきます。

書籍紹介

『月刊福祉』2023年7月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「生活保護と生活困窮者自立支援の方向性」。コロナ禍では、生活保護、生活困窮者自立支援制度の意義が改めて浮き彫りになった一方、両制度がその役割を十分に果たしたのか等の課題も指摘されています。各制度における実際の支援状況等について報告します。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、
平時から考えたい協働の視点～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携協働が必要不可欠です。

本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第4回 新潟県 村上市社会福祉協議会

平時から住民同士で支え合い、 地域課題に取り組む意識を広げる



村上市社会福祉協議会
生活支援課
ちゅうみのる
忠 稔さん

村上市で発生した災害と市社協の対応、 外部NPOとの関わり

2022年8月3日からの大雨の影響で、村上市は越水や土砂崩れにより建物被害が約1,700件に上るなど、新潟県内でも大きな被害を受けました。市では1967年の大雨以降、特に災害がなく、村上市社会福祉協議会(以下、市社協)も行政も、被災経験のない職員がほとんどでした。しかし、2019年の山形県沖の地震の際、市社協として支援活動を経験したこと、その時につながった支援団体が当市でも活動して下さったことが、災害ボランティアセンター(以下、災害VC)の円滑な運営につながりました。特に「NPO法人にいがた災害ボランティアネットワーク」理事長の李さんには災害VC開設時からアドバイザーとして参画していただき、「災害NGO結」には災害VCに常駐していただき、技術系ボランティアの窓口として調整役を担っていただきました。

青年会議所(以下、JC)と協働し 災害VCを運営

2017年に市社協を含む3市村とJCで災害時相互協力協定を結び、災害時の備えだけでなく通常の社協事業でも交流を深めてきました。その成果もあり、被災時にはJCと緊密な意思の疎通ができました。JCには災害VCの運営メンバーとして最初から最後まで関わっていただき、資機材や物資に加え、ネットワークを活かしたマンパワーもご提供いただきました。市社協にとって



災害VCの資機材置き場の様子。
JCと協働で災害VCを運営した

なくてはならないパートナーで、今回の災害VCはJCをはじめ先述のNPO団体や民生委員・児童委員等との地域協働型災害VCだったと感じています。

民生委員と連携し、被災者のニーズの 掘り起こしなどを行う

被災当初は行政でも被害状況を把握しきれない部分があったので、日頃からつながっていた区長に各地域の情報を共有していただきました。また、民生委員・児童委員には初動対応として断水した地域の方々に飲料水を配付していただきました。そして、災害VCに寄せられるニーズが落ち着いてきた頃には、「ニーズを声に出せない人もいるのでは」との考えから、約600世帯の要配慮者を戸別訪問し、ニーズの掘り起こしをしていただきました。その結果、300ほどのニーズが追加されました。こうしたスムーズな連携ができたのも、市社協が民生委員児童委員協議会の事務局を担っており、日頃から民生委員と強いつながりをつくっていたからこそだと感じています。

いつでも住民自身で地域課題を 解決できるよう支え合いの精神を広げる

今回、市内では住民が自主的にサテライトのような機能を立ち上げて支援活動にあたった地域があります。有事の際に地域でこうした取り組みができれば、さらに漏れない支援が可能になりますので、この事例を各自治会に伝えていきたいと思います。一方、センターを通してボランティア活動に参加した市民が全体として課題ととらえています。外部支援はいつまでも続くわけではありません。地域の課題は住民自身で解決していくことが基本ですから、社協本来の業務として、支え合いの精神を広げる取り組みに力を入れていきます。

インフォメーション

ボランティア・市民活動を推進する皆さんのための情報サイト

「ボランティア・市民活動推進情報ページ」を活用してください

全社協 全国ボランティア活動振興センターでは、ボランティア・市民活動を推進する皆さんに、インターネットでボランティア・市民活動に関する統計情報や各地の実践に関わるリンク先を案内する

「ボランティア・市民活動推進情報ページ」を設けています。事業や企画の情報源として、ぜひご利用ください。

●ボランティア・市民活動推進情報ページ
<https://www.zcwvc.net/volunteer/reference/>
「ボランティア・市民活動推進情報ページ」で検索

